



昭和46年(1971年)

3月号 (No. 309)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
エベレスト五十周年……松方三郎……	1
山登りと摂生……麻生武治……	2
大雪山……武田久吉……	2
自然保護憲章を作ろう……村井米子……	3
自然保護憲章案……	3
ある満たされた山行……孫慶錫……	3
国際山岳連盟への招待……	3
ヒンズーラジの地図……	5
ヒンズーラジ……	6
P 29の高度……	6
大平翁のレリーフ……	7
第9回海外登山技術研究会……	7
この一本展解題(上)……	8
会員通信	
開閉……	7
図書紹介	
小さな旅の記録……	9
図書室便り	
定期刊行物受入報告……	9
洋書受入報告……	10
1月到着洋書……	10
図書委員会報告……	10
会務報告	
2月理事評議員会……	10
会員異動……	10
新入会員……	11
第266回小集会……	11
第267回小集会……	11
その他	
駐新日本大使館送会……	10

エベレスト五十周年 松方三郎

エベレストに最初の踏査隊が出たのが一九二一年だから、今年はそれからちょうど五十年になる。何か因縁をつけては、何の何周年といつて記念会をやったり、大売出しをやったりする日本とは違ふから、英国などでどんな催しがあるのか、無いのか、聞いてみたい気がするでもない。

しかしR・G・Sの「ジオグラフィカル・ジャーナル」が、昨年の九月号に「一九二一年の第一回エベレスト遠征とA・R・ヒンクス」という記録を載せたのは、やはりそれと関係があるのであらう。A・Jの編集を昨年まで手伝っていたT・S・ブレイクニーの執筆だが、五十年も経っているのだから当時のいきさつについて相当立入って書いても、もう当り障りもあるまいという考えもあつたことだろう。その前後に関係した人々の間のいろいろな進りとりなど詳しく書いてある。第一回の遠征隊を出すまでの第一次大戦を間に挟んでの二十年近い年月の、いわばエベレスト遠征前史から始まって、

エベレスト委員会をR・G・SとA・Cとで作つて隊員の選考をやり、送り出すまでの話、資金の話、その後の第二回のブルース隊の話などに及んでいて、裏話といへば裏話には相異なるが遠征隊を出すまでの関係者の苦心や複雑な事情など、手にとるように判つてまことに興味の深いものだ。

ところで標題に出てくるヒンクスなる人物は、一九一五年から三十年間R・G・Sの書記をしていた人物、ぼくなども会つたことがあるが、地理学者などに測量の方の専門家として知られた人で、会長サー・フランシス・ヤングハズバンドの女房役として大いに活躍した人だ。学者だけになかなか頑固おやじであり、マロリーなどの登ればいかにやないかという登山派ならびにキャプテン・フラーなどA・Cの面々と、正面から対立したようなこともあつたらしい。ヒンクスからいへば、何はともあれ地図の上のプラントを埋めなくちや、という気持が、どうしても先に立つ。そしてその立場から人々

足な登山隊にいろいろ注文を出すからぶつからざるを得ない。もつともあとでは、マロリーとも大いに肝煎相照らしたというから、ことは大事に至つたわけではない。資金の問題、その管理の問題が出てくるのも興味がある。いづれとも同じということだろう。A・Cの方で集めた分はA・Cに管理を任かせろ、といったようなことを中心にしているのやとりなどもあつたのである。踏査後のハワード・ビュリーの方は報告もまめに寄こしたが、第二回のブルースの方は一向梨のつづで、大蔵省のヒンクスは新聞社の金を引出すのに苦労したような話も出てくる。第一回の隊が若手の登山家としては僅にマロリーとパロックを加えていたに過ぎないといふことは、今から考えればほとんど想像もできないことだが、当時は英国でもヒマラヤの経験者を列べてみると、何れも早や高所の登はんには向かない年上の連中はばかりだったのだ。その連中が、兎特に行きかけたトウィードのニッカア姿で出かけたのだから嘘のような話だが、今日残るその第一回の遠征隊の報告書が何としてエベレストのものの中では、第一等の重味と風格を備えていることも議論の

余地はない。

ところでこのブレイクニーの書いたものを読んで、全く驚いたことが一つある。それは、この話の中に日本が参加しているのである。近藤茂吉先輩が参加を申込みたが、丁重にこたへられた、といった話はあるが、これはそんなことではない。

実はこの第一回の遠征隊を出す計画は一九一九年に出たのだが、印度政府が反対したために、この年の計画は延期になった。そしてこのことについて日本が引合いに出てくるのである。というのは当時中国を真ん中にして日本と英国とが無線局設置問題で対立、競争していた。日本の場合は双機の無線局設置なのであつたが、とにかく英国は英国で、ラッサとギャンツェに同じように無線局を造らうとチベット政府と交渉の最中であつたので、その上に重ねてエベレスト登山の許可などという面倒な話を出してしまふ、印度政府としてはそんな心配かエベレストの方を圧さえてしまつたという話なのである。

政治的問題から、まるで縁のない山登りの方が袖にされてしまふ話は、われわれも身にしみて感じていることだが、海外の遠征の場合、こうしたことが、起ることは今にはじまつたことではないといふことがこの話でもよくわかる。ことに、この場合、日本が一役買つていたとは、まったく意外な話だが、知らぬは亭主ばかり、われわれにしたところで、自分の知らぬところで、どんな心配をかけていないものでもない。大いに心すべきことだ。英国とチベットとの関係がどんな背景を持つてゐるかは、昨年出たマック・グレゴールの

われわれも身にしみて感じていることだが、海外の遠征の場合、こうしたことが、起ることは今にはじまつたことではないといふことがこの話でもよくわかる。ことに、この場合、日本が一役買つていたとは、まったく意外な話だが、知らぬは亭主ばかり、われわれにしたところで、自分の知らぬところで、どんな心配をかけていないものでもない。大いに心すべきことだ。英国とチベットとの関係がどんな背景を持つてゐるかは、昨年出たマック・グレゴールの

Tibet: A Chronicle of Exploration by John MacGregor.

などに詳しい。この本はイエズス会の坊さん達の初期の入蔵記に始まつてヤングハズバンドのラッサ遠征に終つてゐる歴史書だが、かのバンドの物語などにも一章を割愛してあつてまことに面白本だ。ことに英露両国がラッサを真ん中にして対立していた時代、その時代の一時期には、英国側の情報は専ら河口慧海師の通信に依存していた——これも初耳の話だが——ことなども出ていて今読んで手汗をにぎる思いがする。

ユックのチベット旅行記などはかつて日本語になつたこともあるし、英語ではもちろんいろいろ出ているのだから、今度のマック・グレゴールの探検史などは、もつとも網羅的で手頃なものではないかと思ふ。

ヒンクスの相手役としてマロリーの名が出たから、ついでにマロリーの新しい伝記が出たことを書いておこう。もつとも一昨年出たのだから、ぼくだけが最近読んだというところで、こんなことは旧聞の旧聞に属するかも知れない。ただぼくは何年か前に著者のロバートソンから、彼がそのころマロリーについて調べていたところの一部を、直接にきいたことがあるので、特別の

山登りと摂生

麻生 武治

関心を持って読んだわけだった。ロバートソンは、多分マロリーの女婦(次女の夫だが、そのロバートソン夫人は前の夫人で、今は故人となっている)。とにかくそんなところから、マロリー家関係に伝わる手紙の類が全部利用されている点で、このロバートソンの伝記は類のないものだ。恐らく、マロリー伝の集大成だといつてよいのだろうが、彼がエベレスト山上に消えて以来五十年近くになるというのに、こうしたものが出版されるということは注目する値打がある。

マロリー伝については、古くは一九二七年に出たデビッド・パイの追憶がある。故人の親友の書いたものとして名著の名高い本だが、今日では得難いものとなってしまった。そんなこともあってか、一九六七年にはジョーウェル・スタイルスが短い伝記を出している。ただしこれはパイのように故人と直接関係があったわけでもなく、いわば一般読者相手の通俗本だが、こうした伝記ものが出れば、やはり売れて読まれるところが英国だ。

一九六八年のアンスウォースの「著名山岳人列伝」一八四〇——一九四〇などもその一つだが、読んでしまえばこれっきりかと思うようなものでもやはり知らないことが書いてあったり結構面白いからおかしな話だ。例えば変人エッケンタインの話など中でも秀逸だが、字引が索引代りに座右におく値打は確にある。

David Peck George Leigh Mallory, A Mount (1927).
Shewell Styles, Mallory of Everest (1967).

Walter Unsworth, Because it is there, Famous Mountaineer, 1840-1940 (1968).

David Robertson, George Mallory (1969).

登山は競技スポーツではないけれどクリエーションであり、ホビーであるからといって不摂生は許されない学生である、社会人であるを問わず山を愛し、山登りに励む者にとって登山は他スポーツにはない生きとし生ける者にとって冷厳苛酷自己錬磨を要求されるものではない。たとえわれわれは自由主義国に生きているからといって、社会の一員であるからには勝手気ままな行動は慎みむべきである。思わぬ迷惑が思いもよらぬ方まで波及することがあるからである。基本論になるが一般スキーイングが今日のごとく盛められたのは、何に基因するかはここでは問わぬとしても、登山やスキーに長年の経験を持つている人達なら、現今市販され一般に使用されているスキーそのものが搬機によって登降滑降のみにスキーを使う態の品であり、その縮みに到っては、これは全く滑降に重点をおいた代物であるから、大小しかかわらずおおよそツアと呼ばれるスキーを履いての山野跋涉には不適であることくらいは承知のはずである。かかる用具を使って雪山を歩こうなんて考えることが、甘すぎるというより落第である。

それに加えて、若い年代には乗切れたかもしれない不摂生が、六十代から上になるとグッとこたえる。具体的にいうと、日頃の生活態度に懸る。まず百害あって一利なき喫煙の悪習慣は、おそく常習者の大部分がやめたいやめたいと思いつながら、やめられないのが実状らしい。本人は自業自得で肺ガンに罹ろうが潰瘍に悩もうが、第三者の関知するところではないが、一酸化炭素、不燃性ガスを撒きちらすのは、大気汚染の悪徳を侵してゐることを自覚してや否や、喫煙にくらべると、クダをまいたり酒癖さえ悪くなければ、他に害を及ぼさないのは飲酒だが、これまたスポーツの見地からすれば恨度がある。個人差のあることは勿論であるが、アルコホリック飲物の各自の適量は本人が一番よく知っているべきで、医者は理論は知っていても、職場の定期検査や病氣や傷害の際のみにお目にかかる患者の個々に對してあせらせうせと意見がましいことがいえるわけがない。むしろたずねる患者が無知だからこうなつたものだ。そもそも山登りには総合スポーツであり、市街地で手軽にやれる他の競技スポーツなどとはその撰を異にするだけに、その道に詳しい者は、己を持すること厳しくしなければならぬ。ところが現実はその逆で、山登り山歩きをする輩の間に喫煙飲酒がまかり通っているのはどうしたのか。単独行であれ、グループ行動であれ、登高行の成否ないし愉しむか、苦しむか、天候に左右されること、大きな変幻極まりない自然現象に對するに、各自が、体調を整え、必要に応じて機敏な行動がとれるようでない、思わぬ故障が起り前述した如く他に迷惑を及ぼすことになる。老トルの私がたまたまこの短文を草したのは、去る一月九日(土)夜NHKニュースをはじめ、二地方紙などに報道された奥日光スキーツアー遭難未遂云々のお陰で、その夜は各紙首都圏通信局などから市外電話で睡眠を妨害されそれこそ私も思わぬ迷惑をした一人である。当のスキーツアーは雪山歩きのコースとしては、極めて平易な湯元温泉から刈込切込湖廻り山王峠に出て光徳牧場に出る路である。

このスキー行の世話人から、私にも参加の勧誘があつて、私は前日正午湯元温泉に着し、午後仲間の来着まで三時間余を久し振りに脚馴しも兼ねて、シュプールつけたがた湯元温泉から落ちるドビン沢の出合まで行つてきた。履物はスキーの代わりに加奈陀から取寄せたスノーシューズと呼ばれる雪標を使つた。テストしてはみたものの急斜面、ことにそのトラヴァースには不適と判断したから、翌日のツアには加わらないことにした。前日にまして好天に恵まれたのに無為帰京するの残念と、一行の出発時と予定された九時に宿舎の玄関前に出たが一、二人を除いては出発用意が出来ていない。途中までも一緒に歩きたいと思つたがこんな様子では道中が思いやられる。端的にいえば出発時点ですでに脚並が揃つていないことになる。

それに世話人であり、リーダー格が負傷(出発直後部落内で凍結した道路で転倒骨折)してツアから脱落したため、コースを明確に知つていた人がいたかどうか。一行の足並並揃つていればビクニック程度で片づけられるスキーツアーも、装備、体力、摂生の程度がバラバラで、一行十二人の最低者を標準にしたなら、不適格という答が出るのではない。私自身装備の点で不適格と判断したのでツアから脱落しながら他を云々するものもおこがましいのとそしりを受けるかもしれないが、要は他山の石として、あんな人騒がせをまたどこかで繰り返さないよう祈るのみである。

大雪山はダイセツザン

武田 久吉

世の中には、事物の名称に無頓着な人が少なくないようで、自分の登つた山が何であらうと、別段気にとめずにいるという、楽家とでもいうか、

羨ましい程気楽な人があるかと思えば厳格に正確でないとい我慢が出来ない質の人もある。気楽な人は何にもこだわらないから日常のんびりして居られるが、些細な事にまで気を使うのは中々わるくないことである。さて、北海道の名山大雪山の大を大家、大友、大尉、大佐、大化のように清音で読むべきか、それ共、大工、大臣、大根、大蛇、大学のように濁音で読むかは、とかく問題となる。その他に行つて尋ねて見ると、どちらでも通じますという、是亦吾人返事に、要領を得ずに引きさがる外ないことに、なるが、一定して置いて呉れないと、困ることがある。

自然保護憲章を作ろう！

村井 米子

自然保護憲章を作ろう、との声は、五年前の第八回国立公園大会でおこった。伯耆大山の鏡ヶ成国民休暇村で、昭和四十一年八月九日。赫々たる太陽のもと、テントの会場で晴れわたる蒼空を仰ぎながら、決議したのも印象的だった。全国からの参加者の中から国立公園協会、新生活運動協会、日本山岳協会、日本観光協会、日本自然保護協会が幹事団体となったが、案作成の世話役は日本自然保護協会と決った。

西独マイナウの「みどりの憲章」は、ボーデン湖畔、マイナウに集った各界

自然は人間生存の基盤である。自然の適切な保存と調和のとれたその利用によって、人は、心身ともに健全な生活を営むことができる。

わが国土の美しい自然は、われわれが祖先から受け継いだ貴い共通の遺産であって、われわれは大切にこれを保存して、後の世代に伝えなければならない。

しかるにわれわれは、これまでやもすれば自然のめぐみの偉大さを忘れ、また自然が生物におよぼす機能にもあまり無関心でありすぎた。

すなわち自然は無尽蔵であるとの錯覚から、産業の開発、ゆたかな生活のための文明の向上の名において、自然のめぐみを乱費し、その調和をそこなうてかきみみになった。この傾向は、近時特に著しくなっており、自然界における生物生存の諸条件は至るところで均衡を破られ、その結果、太陽の光線はさえぎられ、大気は汚染し、水は汚濁し、緑の大地は失われ、人の肉体的健康も、精神的

代表が、ベルナドッテ伯を中心に五年かかって作られたと聞く。私たちが、各国各方面の自然保護の法律や憲章、教書など資料あつめや検討に、いつか五年の月日が流れた。

この間に、花を手折るな小鳥に石を投げるな、の次元から、人間の生存のための自然環境の保護、公害対策と自然保護の必要性が高まり、切実となり一般によりやく普及してきた。

この時点でこそ、と昨年末から草案委員会が作られ、林修三前法制局長官が委員長となられ、私も加わった。八回の研究部会と五回的小委員会を重ね

安定も傷つき失われるに至っている。この状態が継続すれば、人類の未来に對して重大な結果をもたらすに至るおそれがある。

われわれは、いまこそ、このことに思いを至し、自然の偉大さ、自然界の法則の厳肅さにめざめ、これまでの自然征服といった考え方を払拭して、自然の保護とその賢明な利用に十分な意を用い、人間の生活環境の保全に総力を

自然保護憲章（案）

を結集すべきときであると信ずる。

よって、われわれは、ここに次のような自然保護憲章を採択し、国民各層および国、地方公共団体の各機関の心からの協力と実行を期待する。

一、自然をたつとび、自然に親しみ美しい国土を保護することは、すべての国民の義務である。

た結果、前文と十一項目をつらねる次のような案がまとまった。児童憲章にならって、国民みな心の構えの基とし、わが国の自然を、もう現在以上荒らさず、保護復元して、後代に伝えたい願望である。つづいて解説書を作るが、自然保護といふことばの内容一つでも、各学者有識者の間で話し合つてはじめて確実になり、景観という表現にもドイツは風光と学術的価値があるが、アメリカでは風光のみ、公害問題の扱い方……しかも日本語にはあいまいさがあつて、困難が多かろう。

一、自然の保護と開発の調和を促進し、自然の恵みを利用するに努め、自然を大切にすることは幼児時代から教育によってつちかぬ心なければならぬ。

この教育には、家庭教育、学校教育および社会教育が含まれる。

三、自然の保護は、自然の仕組みの微妙さを正しく理解して、自然の調和をそこごうこととなく、自然を賢明に利用することによって全うされる。

四、自然景観を保護し、国民の生活環境を保全することは、国、地方公共団体の最も重要な責務である。

美しい自然景観や学術的価値のある自然を損傷したり、国民の良好な生活環境を破壊したりする行為は、国、地方公共団体の法令によってきびしく規制される必要がある。

五、公的、公共的な理由による場合でも、みだりに自然を損傷破壊することは許されない。

ある満たされた山行

1970 年ソウル大学文理科
大学 O B 山岳会訪日隊長

孫 慶 錫

一九七〇年のソウル大学校文理科大 O B 山岳会訪日登山隊は、長い間思いつめていた日本の南アルプスの新緑を見たという願望を満たすものであり、あの白根御池の山稜をうめる、目

六、産業その他の開発にあたっては企業者は、常に自然景観の保護および国民の生活環境の保全を尊重しななければならない。

七、観光レクリエーションのための施設によって自然景観を損傷破壊することは許されない。

八、自然の保護と開発利用と優先度の判定は、権威ある国家機関によって行なわなければならない。

九、自然を損傷破壊した者は、すべてみずから手で自然を復元する義務を負うものである。

十、国、地方公共団体は、都市に於いても、公園、緑地その他の公共的な野外レクリエーションの場を確保する措置を強力に実施するものとする。

十一、よりよい生活環境を作り出すためには、国土の積極的な緑化が急務であることを認識し、国民のすべてが参加して国土緑化運動を展開するものとする。

財団法人 日本自然保護協会

さめるばかりの緑の鮮やかさは、カラッ風が吹き始めた今、韓国の初冬さえ、未だにはのめかしい薫風となつて思ひ出させる。

もうすでに四年も前のことである。日本山岳会の折井健一氏の紹介で、百瀬舜太郎氏が来韓された。その折、母校であり、私の所属しているソウル大学校文理科大学を訪問されて若い学生達と語られた一晩が、今度の訪日隊を南アルプスに導いてくれた。

ちょうど、そのころ韓国では、未踏の冬山岳線が一つ残されておられ、この雪岳山西北主稜線積雪期完登には、極地法を採用する以外に途はなかった。しかし、強風と寒気に耐えるテントがなかったことを、あの晩の語り合いで知った百瀬氏は、帰国後、甲府ライオンズクラブと山梨県の韓国居留民団、山梨県岳連の好意で、冬期高所用天幕六張が寄贈され、その年の冬、その未踏の西北主稜は二十日間の苦闘の末、踏破された。このように、たびたびの交流があったが、またもや、今度は、百瀬氏よりソウル大学文理科大山岳会の訪日と、促された。国立大山として日本の登山のため出るといふことは、いくつもの難関を突破して始めて実現されたわけで、今度の我々の満たされた山行は、その間、三年間の苦しみを越え意義あるものとなったからこそ、より一層意義あるものとなったのである。

ともあれ、最後の難関であるピザが発給されたのは、梅雨期に入った六月であつたが、梅雨が明けるのを待つなどという余裕もなく、あわただしい旅立ちであつた。隊員七名の出発に先立ち、私と隊員萬錫勲君が準備のため空路、福岡入りしたのは六月十三日。空港で、西諒氏一行に迎えられ、北九州の山なみハイウェイを途中まで、案内して貰い、別府では野口 J A C 支部長にも御世話になり、高崎山の野猿

とたわむれたり、地獄をのぞいたり、雨は降っていたが、心は晴れていた第一日目であった。

空路も海路も雨で閉ざされていたので仕方なしに満員の列車で、新大阪へ、そして新幹線に乗り変えて東京へ。東京駅にはJACの城山正三氏が手を振って迎えてくれ、自宅へうながされ、再会の語りは夜更けを忘れる。

翌朝、親切に甘えた御礼もそこそこに、再会を約して、JACの韓国担当海外連絡委員関周也氏を丸ビルの事務所に訪れ、種々打ち合わせ、雨模様の日であったが、今日中に甲府へ着けばとの安心故か、あるいは旧友との再会故か、九州到着以降のあわただしい時間を忘れる思いであった。甲府駅では、百瀬氏を始め、訪韓された方々の出迎えを受け、これで家も同然のところへ来た思いとともに、疲れがドッと一時に感じられた。

甲府では、歓迎委員会まで組織されてわれわれ一行のための準備が万端ととのつており、山行へ同行する方がたも決められていた。「もう二週間早ければよかった」と残念がられたが、これも事情が許さなかったこと故、仕方ないことで、細微にまで手をつくしてくださったので、歓迎委員会の皆さんの心づくしには御礼の申上げようがないほどであった。夕べの街はたのしいつどいの場となり、語りつきぬ交歓であった。

本隊の船は一日延着して十八日になるといふ。甲府での準備万端を整えてから神戸へ向う。埠頭に雨をしのぐ場所もなく、朝から待ちあぐんだ船は午後になっても予定がわからぬという。地理も言葉もわからぬ本隊の隊員達をたいた待つ隊長の辛さは、背後の六甲山のみが知ってくれていよう。午後三時、待ちに待った船が水平線に一点認められる。空港の親切さとは、程遠

い素振りのサービス。船の客は客でないらしい。翌朝四時半、三の宮から新大阪へ、そして静岡で、富士川一号へ乗り換えて甲府入りを果たした。

特大キスリングに、食糧ボックス等大麦の荷物を持った我々は、甲府駅で温く迎えてくれ、会合の場に入ったときは、これで良かったのだ、と思う気持ちで一杯であり、満たされた感激につつまれた。席上で、ビッケル五丁の寄贈を受け、開湯温泉旅館に、ぬれた山装備を積み上げたのは、唯々甲府の人々の温情に甘えたからであり、仁者兼山の信条のみであろうか。

六月二十日は、金嶺嶺山梨県民団本部長と渡辺氏の車が前後に連なり富士山五合目へ向う。果樹の沿道をすぎ、潤葉樹が針葉樹に変わり、カラ松の緑を賞でて、御庭の広場へ到着。ここは御坂山岳会の前嶋、染谷両氏が迎えてくれる。私にとりて、三回目の富士山であるが、夏の富士は初めてであった。隊員達は、期待していた雪渓がないので少々がっかりの様子。

明るく、朝六時、未だに梅雨の小降りが続く中を前嶋氏を先頭に、防雨具につつまれて全員出発する。早いリズムになれては隊員達に、確実に歩行するよう注意しながら七合目へついたら、小雨も強い風をとまなかった本降りになっていた。入国以来の激務の疲れがでたか、不調気味の隊長は、御坂山岳会の人達に隊員を任せ、とリーダーの李君に相談する。隊長はここで登頂を断念、まことに自由、勝手気ままな隊長ではあったが。

翌日は、五湖巡りののち甲府にもどる。山梨大OBと現役、落葉樹山岳会の芦沢リーダーと榎ノ木山岳会の北川氏が宿で待っている。

二十三日、富士登山の疲れをいやす間もなく、マイクロボスで、夜叉神峠、野呂川林道を経て、広河原へ。小休止ののち、大樺沢を直登して、白根御池小屋へ入る。

翌朝は、幸いなるかな晴天気味である。この日を推薦してくれた百瀬氏の予報が見事に的中した。いよいよ白根三山の縦走と北岳バットレに挑む。バティを二つにわけて、芦沢リーダーに運行を任せ、この日の停滞は、隊長外二名。山梨大は李リーダーと榎ノ木山岳会は、李載仁サブリーダーと北岳第四尾根に、落葉樹山岳会は、金成起君等とバットレス第三尾根にとりつくことになる。停滞組は、小屋の掃除と炊事番となる。残雪に覆われた草すべりは、御池から靴下をぬらせるのにちょうどよい。一行が八本歯から雪渓をつめて北岳稜線をたどる時、小屋の整理は終了。天気快晴の南アプラブラ停滞とは、虫の居所も悪くなる。謀議は即刻満場一致、早速食糧をサブにめて、草すべりから、この北岳をめざす。

甲府の岳人の夕べはこのほかに楽しいものであった。われわれを歓迎してくれた山梨のオールライオンズクラブ、民国の友人、そして岳連の人々、明日の北アルプス行を前に、送別の宴を開いてくれたものだった。その夜は全面的に禁酒令を解いた。

甲府駅での別れは、再会の日を約すものの目頭が熱くなるのを覚えた。上杉甲府ライオンズクラブ会長を始め、幾日かではあったが、共にたのしみ、喜び合った岳友との別れは、北岳の歌そのものであった。

松本では、高山忠四朗前JAC支部長と、長野岳連の知人達が迎えてくれた。上高地のJAC山荘へ入った。穂高周辺での約一週間も楽しいものであったが、紙数の関係で詳細を書くことができないのが残念である。酒沢ヒュッテに小林氏が迎えてくれ

たときは、五年前の秋の来日しがきりと思い出された。あの時一緒だった李君も南宮君も、冬の雪岳山の深い雪崩に埋もれてしまった。紅葉の美しかった酒沢の水圏で遊んだ追想が、つぎのことない。

晴れる日が多く梅雨期とは思えない日が続く好運に感謝しなければならなかった。北穂に奥穂と毎日、隊員達は散っていた。滝谷の中央ドームに登ってきた隊員、屏風岩の雪稜ルートに直登する隊員、槍まで縦走する隊員と、心ゆくまで穂高山域を楽しんだ。七月十日には東京JACルームで、深田、吉沢副会長、各理事有志に囲まれた。遠く北海道よりも友が参じていた。安藤が歌われる東京の一角では、深田久弥氏が説いた「岳人無界」の真の友情が、交歓された。

帰路、神戸では津田周二元関西支部長に迎えられ、また、折りから開催中の万国博へ足をのびすことができた。神戸の土を踏んでから一カ月後、再び船の人となる。静かに埠頭を離れるとき、長いようで短かった日本での一日一日が走馬灯のように、かすむ目頭に写し出された。

国際山岳連盟青年部集会へ招待
チェコのスロバキア山岳会から次のような案内(招待状)が来た。希望者は本会事務局まで御連絡下さい。

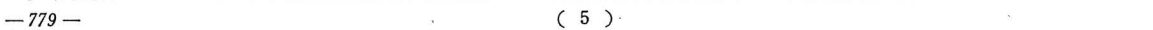
・期間 八月八日―十五日
・人員 各国団体より二名招待
・八月八日チェコのホーエン・タトラのケルマスカ・チャタ小屋に到着のこと
・八月八日―十五日間の宿泊、食料、乗物などは企画者側で世話する
・純粋に個人的支出は自弁、タトラまでの往復交通費も同様
・参加者は登攀およびハイキング用具を用意する。アイガン、ビッケル

「山岳」広告のお願い
「山岳」第六十五号は本年度刊行を目標に編集をすすめています。皆様により広告先の御紹介をいただきたくお願い申し上げます。次第です。お心あたりのございます方は事務局までお知らせ下さい。

▽広告料金(印刷黒一色)
普通一頁(25×38cm) 一五、〇〇〇
1/2頁(25×38cm) 八、〇〇〇
1/3頁(25×38cm) 六、〇〇〇
英文見返一頁 二五、〇〇〇
奥付見返一頁 二五、〇〇〇
裏表紙見返一頁 三〇、〇〇〇 (以上)

「山岳」編集委員会

(三頁より)
頁には、だいたいせつざんと振仮名がしてあるということである。尤も、このルビの濁点は、「非常に小さくて間違え易い」そうであるから、国立国会図書館の蔵書では、かすれているのかも知れないが、この点は、自身調査して見なければ、実情を知ることが出来ないが、それはとに角として、已に確認のある以上、清言説は撤回の外ないと思われる。



C スンズー・ラージ

三、千葉工業大学隊

隊員、狩山謙(21)、関裕明(25)
活動地域、プニ山群南方、ソニョアン
氷河源域

登山活動、チトラル(720、21)、プニ
村、マスツージ、BC(726、ソニ
ョアン氷河末端、四〇〇〇m)。

AC(731、ソニョアン氷河上五〇
〇〇m)、イシュペル・ゾム東峰登
頂(81、六〇〇〇m、二人)、ソニ
ョアン・ゾム登頂(85、二人)、レ
ンジュ・ゾム東峰(六一〇〇m)試
登(装備不足のため五六〇〇mより
退却する)、BC撤収(811)、マス
ツージ、チトラル(814)。
(注)ソニョアン峰は五六二五mなら
ば、イシュペル東峰は五九四五m。

四、同人登勢嶺会隊

隊員、佐藤忠司(31)、矢口康男(26)、
山本洋男(25)、栗林修子(27)。
活動地域、プニ山群南方、リンジー河、
ソニョアン氷河、ゴルドハン・氷河
登攀活動、チトラル(75、8)、チャ
コリ(710、12)、BC(レンジュ
河、AC。アジュディ・ゾム(五一
〇〇m)登頂(子供山、714、矢
口、山本、栗林)、アドルフ・ゾム
(五五〇〇m)登頂(ロバの山、717、
全員)、バルガム峠越え(五〇五六
m、724、25)、ゴルドハン・ゾム
(六二四〇m)登頂(727、全員、
但し法政大学と同様、肩までと思わ
れる)、ソニョアン・ゾム(五六二
五m)初登頂(81、佐藤、矢口、
山本)、BC撤収(86)、マスツ
ージ、チトラル(89)。

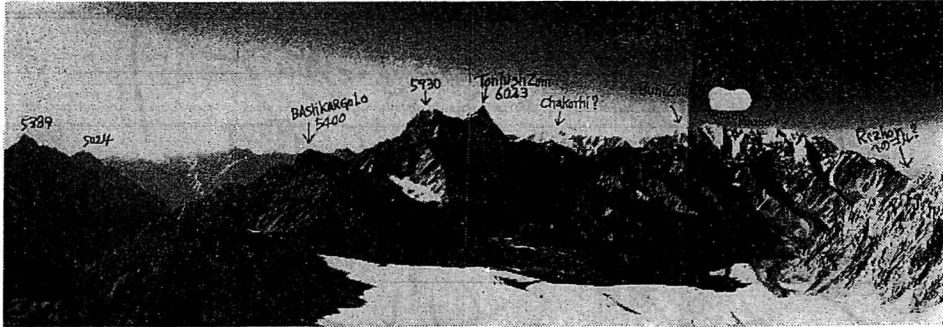
五、西部カラコルム

教育調査隊

(スワットの「四」)

隊員、高田直樹(32)、関田和雄(32)、
安田越郎(20)、中村達(19)。
活動地域、スワットのハラハリ谷、マ
ナリ峠越え、バシカルゴロ湖。
主として調査活動ガブラル発(719)

イシュペリリ峰方面より北望(慶大隊)



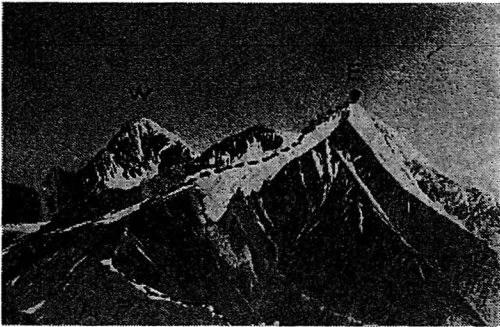
BC(721、ハラハリ谷、三六八〇
m)、AC(ハラハリ氷河、四〇三
〇m)、マリナ峠(724、担夫はハラ
ハリ⁸²と呼んでいた)、峠で測量、
AC2(三六七〇m、マナリ河)、
タロ湖往復(725、安田、中村)、
BC着(727)、ハラハリ村調査、ガ
ブラル着(83)。

◇ (追加) B、スワットの「五」

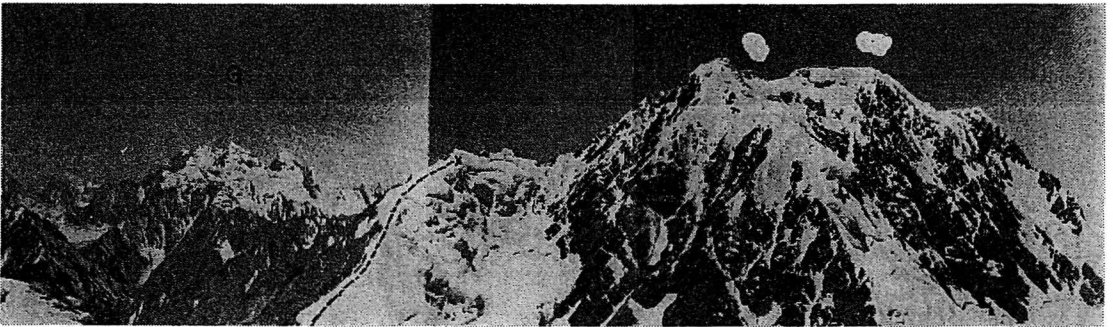
蒼棲会(上田)他

隊員、久保田瑞枝(23)、長岡美智子
(23)。

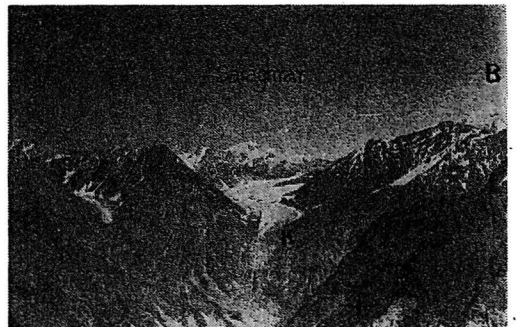
活動地域(トレッキング)、カラム(522)
ウシユ日帰えり(524)、ガブラル
(525)、ガブラル谷右俣、四〇〇〇
m付近まで(526、29)、ガブラル
帰着(529)。
(以上をもってHK関係終り)



イシュペル・ゾム東峰と西峰
西峰の双頭に注意(千葉工大)



右、レンジュ峰、G・ゴール峰、
千葉工大



中央はサラケラール山塊とコラボー
ルト氷河。Bはプニ・ゾム主峰。
Kは断崖(三〇〇m)と滝・千葉工大

◇ P・29の高度は元のまま◇

GOD老とAボリンダーがつくった
高山表に、P29が七五一四mとなつて
いたので、驚ろかれた方も多いと思
う。私も半信半疑のままD老に従って
いたが、最近この山に関する彼からの
手紙の中に七八三五mと、もとの高さ
が入っていたので、私は早速嘴みつ
いてやった。返事は次の通り。

「七三〇〇m以上峰のリストでP29
を七五一四mとしたのは、実はある方
面での誤まりであれは南の肩の高度で
す。私とロバーツは直ぐ気がついて訂
正しておきました。この夏発表する
「七二〇〇m以上峰」のリストではも
との七八三五mに戻しておきます。別
刷りは、勿論送りますから、見て下さ
い。」

他にも何か書いてあったが私はこれ
でホッとした。(吉沢一郎)

楽天園に大平晟翁 レリーフ建立

渡辺 真一

快晴の昭和四十五年十一月三日、小千谷市高梨町の太平邸前で大平晟翁レリーフ除幕式が行われた。眼下の信濃川は悠々と流れ、その対岸の金倉山はぬけるような青空にスックとたちあがり式を祝おうと見おろしていた。手近な山として氏がしげしげとよかつた山である。

午前十一時、神官のお祝いのあとと花火を合図に遺族の手によりテープが引かれ、その温顔が出席者一同にほほえみをみせた。なんという顔であろうか。数多くの教え子たちに慕われ、沢山の孫子にかまれた七十歳の田舎教師の顔である。また、「予が始終山に登るので、或る人達は山伏になったのか、行者になったのかと訝るものもある。予は世間の所謂山伏でも行者でもないが、別の意味における山伏であり行者でもある」と豪語した老雄の顔でもある。

大平晟——勤勉にして有能な教師、すぐれた登山家(会員番号三十一、名誉会員)の二基目のレリーフはこうして自邸庭前の楽天園にたつた。この二百坪の土地は教え子たちが先生の植物研究のために贈ったもので、晩年の氏は自らを楽天園主人と称し植物の栽培育成を楽しんだ。その数百種の植物目録「十紅万緑」がある。

還暦をこしたと思われる教え子たちがなつかしうそこに見あげている風景はまさに恩師大平晟、郷村高梨へかえるという感じであった。

昭和十年、当時会長であった高頭仁兵衛翁を中心に藤島玄、稲田豊八、雲尾東岳らの発起人の努力で氏のレリーフは苗場山の頂にたつた。その時のレ

リーフ製作者が羽下修三氏である。若き芸術家・羽下氏の太平像は自分でも納得のいく快心の作だった。羽下氏は依頼主にわたしてしまうのが惜しくなり、苦勞のすえ、もう一基製作していただいたのであった。その大平像は個展等に出品される時のほかは氏のアトリエにねむっていた。実に三十余年のことになる。近年、身辺の整理にかかれ氏はこの愛着ある作品も遺族に贈ることとされたのである。昨夏、小千谷市公民館の手を通じ大平家へかえった。さつそく教え子たちが中心となり「大平晟寿像建設委員会」が発足、今日のこびととなったのである。

地元名士、教え子らの紋切型の祝辞や氏をなつかしむ思い出話のべられ最後にJACを代表して藤島玄越後支部長が挨拶にのびた。「大先輩、大平氏の寿像が苗場山頂につぎ郷村高梨にたつたことは、まことに喜ばしいが、ほんとに氏を記念するならば、これで終わるのではなく、これを出発点として、今後おいに大平氏のなした仕事をふりかえり、研究しなければならぬ」という意の重要な言葉。お孫さんにあたる当主成氏の謝辞をもって式を終えた。

山紫水明の高梨町。町といっても農仕事を手ばなして、しゃがんで両頬杖をついて式を眺めている主婦もいる。農協の米倉庫から杉小立をお宮の屋根へ鳩が飛びかかっている。そこに老村長さんのような顔をつけた寿像がたつた。なんともどかなすがすがしい除幕式であった。

△参加者 藤島玄越後支部長、久保田全、松坂良一、石川三知子、渡辺真一

本年度会費未納の方は至急お納め下さい。東京、千葉、埼玉、神奈川在住者は三千円。地方二千五百円です。

会員通信

開聞岳

山下 久男

開聞岳は本土最南端の山で、形が富士に似ているのでサツマ富士と愛称されている。標高九二四mにすぎないが山裾を東支那海におろした円錐状の二重火山で、その秀麗さは比べようもなく誰しもたて止まさない。江戸時代の旅行家、橋本路翁はその著東遊記名山論で、「山の姿のよきは島海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山、海門嶽なり。皆甚富士に似て一峯秀出、画がけるがごとし」と述べている。私はこの山に二回登った。その一回目は、昭和三年九月三日のことであった。その当時私は二十五歳、三田の文科に通っていた。私はまさに苦悩にみちた青春時代に遭遇していた。その打開を求め、東京麻布の下宿にリュックに墓塵をつるし、草鞋ばきで飛び出したのがその年の三月十六日。箱根を越えて東海道をひたひたとひとり歩いた。法隆寺の壁画を見たのが四月二日、その印象は深かった。更に熊野路を経て新和歌浦に出たのが四月十七日。春の旅をここで切上げた。しかし私の旅への気持ちはずつと上りつづきであった。七月十六日家郷を出て徳島の椿泊に上陸。ここから四国路を南へ、土佐の海辺から石鎚山を登頂して松山へ。更に別府に渡り豊後富士・九住山・阿蘇山へ、推葉村をさぐり高千穂、霧島を経て、この開聞岳へ。東京からこの山の上までの旅の日数は八十三日。この山から南西諸島を望み、台湾の旅から更にチベット高原行を夢みた。二回目に登ったのは昭和四十五年十一月十日だった。鹿児島市の自治会館で第二十二回目の日本

民俗学会年会有り久し振りに出席した私はふと開聞岳登頂を思い立った。同会に出席の伊藤徳重氏に、是非同行を望まれた。山麓から頂上まで四千米という。開聞神社側の山麓から登り始めたのが九時五十五分。牧場には牛が二十頭ばかり放たれていた。松の木立をすぎずる頃にはつばの花がそこそこみられた。シメヤツグミなどの小鳥類も多い。冬の蝶も折々頭上を横切る。ミヤマツツミが白い花をみせている。流石に南国樹種やクスノキ科の植物が密生している。らせん状の細道を辿って登る。展望がよくきく。あと五百mで頂上である。フザミが咲いていた。十三時十分いただきにつく。私が四十二年前にこの山の八合目近くで、岩にもたれて一夜を明かした。そこはすくわかつた。昔のままの様子であった。それがとても嬉しく懐しかった。その岩膚を撫でながら、私より二つ年上の同行の伊藤さん(当時にこのことを語った。今もこうして歩くことを一向苦にしない健脚さ)も、若い時にこのような徒歩旅行をしたおかげかと思っている。そしてチベット高原を夢みる心のなごきのすみに生きているのを感じるのである。

若き日の旅の終わりととなりし山ふたたび登る四十三年後に山径に太きみずすの這い出でて碧く光れることは海門
そのかみに一夜宿りし岩膚を撫でさすりつづしばしやすらふ。
(昭和46・1・24稿)

◆第九回海外登山技術研究会
期日、昭和四十六年一月三日(土) 二四日(日)
場所、東京都八王子市下柚木(野猿峠上)、大学セミナー・ハウス

参加者 一四〇名

両日とも少し寒かったが快晴、スモッグの東京からずつと西に離れているので雪の富士山がくっきりと見えていた。顔見知りのベテランも多かったが三分の一は新人とのこと。頼母しい限りである。

司会者は芳野越夫氏、開会は定刻の一〇時半より少し遅れたが松方会長の挨拶(海外登山のあり方に多少触れる)に続いて講師、参加者全員の自己紹介。これは無きに優る程度で余り効果はない。

海外情勢は松沢憲夫氏が来ず、外務省の窓口で皆がお世話になっている牧内恭人氏がネパール事情について最近のことを述べられた。吉沢(私)は相変らずヒンズー・クシエ情報の紹介だが、他に漫談的なことも加えた。

午後は大見出しが「大規模登山隊の問題点」で内容は酸素、戦略、実施上の問題点、遭難の実態と処理という項目に分けて進められた。

夜はJACのエベレストと東海支部のマルルイの映画。そのあと各自思いの部屋で怪談が行なわれる。

第二日の特別研究発表は高所医学、地形、地質、岩石、気象等に関するものであったが実は難かし過ぎるという者もあった。

午後は七〇年度の登山隊の報告が主であり、特に住吉仙也氏のP29の説明に緊張した。

閉会の辞(吉沢)で終わったのが四時。懇親会も賑やかであった。

(吉沢)

日本山嶽志復刻版発売中 高頭式氏の名著「日本山嶽志」復刻版を発売中です。原典と全く同様の復刻版です。希望者はルームへ御申し込み下さい。頒価四千五百円(送料二百円)です。

第九回

この一本展解題(上)

(昭和45年12月12日マツヤサロン)

江戸末期の富士山画帖

小泉 斐(檀山)

富嶽写真 33x33.5 折本秩入

弘化二年序

江戸時代における富士山文献として紀行・詩歌の類はあまたあるが、絵画、それも周辺からの遠望でなく山中に取材したものとなると、わりあい少ない。そんな中において、頭記のものが登攀中に題材を求めた点において出色、当時の登山風俗その他を今日に伝える好文獻といえよう。

内容は、小竹散人の題字、東奥安積信の序文を巻首に掲げ、「和田林、十里木の風俗」「五国「華華寺の勝景」「一合目木立夜中之図」「須山口絶頂欠図」「絶頂図」「下岳遭風」「五合目上六合目俯瞰景色図」など二十数図を画帖風に仕立ててある。後序に春齋賀来惟俊の撰文、また出版に協力した補助門生四名の名を列ねている。

(小林義正)

また愉しからずや

三島由紀夫自決事件で少しばかり忙しかった勤務を終えた十一月二十五日夜、きょうはひとと城南方面へ行ってみるか、と帰宅時間を遅らせて、道楽の魚釣りならぬ本釣り、いや古本あさりに出かけました。釣師はみな自分だけのアナ場を持っていると言われますが、私にそんな所がないわけではなかったのです。

二、三軒まわって収獲なし、あとはあそこへ寄ってぼつぼつ帰ろうかとや

って来たのが、商店街のにぎやかな店にはさまれてつい見過ごされがちな、間口一間奥行き一間半ほどの、一見、くなく本などないような見すばらしい古書店でした。

店内の書棚を右側から左側へと見て廻り、最後に入り口左側の五十均均一の書棚に目を走らせていたところ、なんと、日ごろ愛好する坂本直行氏の若き日の文章なりスケッチがかなり載っているのではと期待していた北大山岳部々報、その4号が人待ち顔に収まっているではありませんか！

「これだからやめられない」。私はタダ同然の値段で手に入れた本のこのように重みを右手に感じながら、釣り上げた獲物にほくそ笑む釣師もかくやと家路についたことでした。

たった五十円で入手した北大山岳部々報。山岳書値上りの著しい昨今、東京にもまだこのような店があるのだろうか。古本あさりまた愉しからずやというところ、お恥かししい次第ですが敢えて「この一本展」に出品させていただきますました。(林清)

まぼろしの本

—津田正生「鎗ヶ嶽日記」—

「この本の存在は、岳友高頭仁兵衛氏から教示せられ、本も同氏から借覧したものである」とは故小島鳥水会員著「氷河と万年雪の山」の一文である。

尾張の、津田正生(六合庵)という学者が天保四年(一八三三年)北アルプスの槍ヶ岳に登ってからの、「鎗ヶ嶽日記」を出版したというが、はたしてほんとうなのだろうか、というわけ。小島さんのいわれた「この本」とはここに御覧になれる和本「眼前教近道」(まのあたりをしへのちかみち)なのである。この本は弘化四年(一八四七年)求刻のもので、終丁の表に「六合

庵先生著述」とあり、次に、補削姓名弁疑 堀尾有秋翁著 全一冊
良姻心得草 既 刻 全二冊
六合庵隨筆 近 刻 全二冊
画本方治方言 全一冊
鎗ヶ嶽日記 全一冊
日本大社廻り 全二冊
屋張国地名考 全二冊

とある。これを見ればこの本が世に出たと信じたいのである。しかも出ていないのは「近刻」と親切につけたしである。だからその他の本は出版されているときめてしまえば、どこだどこだ、その影を追うもよいであろうか。又、こう考えてはどうであろうか。「六合庵先生著述」の著述を出版目録と考えず、六合庵の著述が右記のもので、たまたま、「良姻心得草」だけが既刻であります、と考えたらどうであろうか。

しかし、「まぼろしの本はないにしても、せめて「まぼろしの原稿」が、現在の「鎗ヶ嶽日記稿本」となっても私の「眼前」に顔を見せていただきたいものである。(小野 幸)

H.B. De Sausure Par
D.W. Freshfield edition
Atar-Genève, 1924.

一九二〇年にロンドン・アーノルド書店から刊行された原典(ジ・ライフ・オブ・H.B.ド・ウ・ソウシュール)は、戦前JACが虎ノ門にクラブブルームを構えていたところ、ライブラリーが出来たときに、はるばる英国のウエー・ストーン老から寄贈されて、JAC所管本の中にあつた。日本山岳会創立三十周年記念として、日本橋・丸善で催された山岳図書展覧会(昭和十年五月三日〜七日)にも出品された。

解題は、恐らく松方三郎君が書いたものだろうが、改訂の要を認めないからそのまま借記しよう。「探検家、登山家として全く比類なき業績を遺したフレッシュフィールドは歴史家としても幾多の貢献をしている。ド・ウ・ソウシュール伝はその中の最も重要な一つである。モン・ブラン登攀、氷河研究等でアルプス登攀史に不朽の名を残したド・ウ・ソウシュールその人については、殆んど説明を要しない。謂わば本書は偉大な山岳人の手になる、偉大な山岳人の伝記である。山岳誌家としてクリリッジと並び称せられるモンタニエ(一八七七一〜九三三年)が本書著述に当っては重要な協力を献げていた。」

この著述によって著者は、ジュネーブ大学から名誉博士の称号を贈られたという。(アルプス記九六頁)

戦災を免かれた僅かばかりの本の中に、この伝記本があった。いまでは珍らしい一本といってもおかしくないであろう。英語の原本を所蔵の会員があったら、明年の一本展に出品して、拝見させてもらいたいとおもふ。(藤島敏男)

ガルワールの15万地図

ガルワールの地図なんていうのは今は余り実用的でない。あそこは現在インドの兵隊さん以外入れないことになっているからである。

しかし、ガルワール地方はヒマラヤ開拓史上、非常に重要な地域で、一九三〇年代以前の有名なヒマラヤニストこの部分に足を入れていない人は余りない。

そういう人達が書いた書物などはもう半古典になってしまつて仲々手に入らなくなつてしまつたが、どうしても読もうとなれば読めないことはない。

何処かに必ずあるからである。

それにしても登山記や旅行文を読むにはどうしても地図がいる。本や間に小さく印刷されている概念図だけでは物足りない。全体との関連において研究する場合には大きな地図があった方がよい。

そういう意味でこのガルワールの東部と西部の15万図は今時、非常に貴重な資料となるのだが、残念なことに現地で売つてくれないうばかりでなく、持つて行くことと取り上げられてしまつという評さえる。

また、東部は以前買った人も沢山あると思うが西部は持っている人はあるまい。これは「この一本展」に出しても恥かしくない代ものではあるまいか。この中にある主な山は、パドリナート、ニルカンタ、ケダルナート、サトバント、バンダールブンチなどで、東径七八度で左端が限られているので、レオ・バルギアルは入っていない。

それにしてもインドはこの地域への入山許可をいまだに出していない。そして出そうという気配もない。これはどうかと思う。(吉沢一郎)

『鳳凰山』と私

南アルプスの鳳凰山。私はこの山を西に仰ぎ見る甲府市で育つた。そんなわけでよくふつと山を知り、山を始めることともなつた。やや本格的にアルビニズムの味をかみしめるようになったのもこの鳳凰山が最初のことであった。

卒業論文も実はこの鳳凰山に焦点を合わせた内容のものであった。

加賀爪鳳凰山の『鳳凰山』が私にこの山に関する文化的所産の調べを思い立たせてくれた。いわば動機づけを与えてくれたのである。小林義正氏の『山と書物』にも紹介されたこのまじ

めな書物は、加賀爪氏がこの世に生きられたひとつの記念であり、証明でもあるとみなすことができそうである。

手もとにある署名入り本は、もう何年も前に甲府市内のある古書店で手に入れたものである。しかし、「鳳凰山は我孫の故郷であり、亦墳墓の地でもある」と墨跡あざやかである。

鳳凰山の麓で生まれ、そして生き、そして死んでいった加賀爪氏。氏はすでに生前からこうした人生の概を署名入りの自著に記されていたものである。全身全霊のこもった書物であるとみるのである。興味ぶかくも感動をおぼえる。

「贈網野兄」としてあるが、網野氏がどこのどなたであるかは私にはわからない。

また署名のすぐ上部には「李王垣殿下御嘉納米」と記された朱が捺印されており、皇族が雲の上の存在であった時代の背景など考えあわせると、加賀爪氏にしてみれば光栄のこまない貴重な書物であったものかも知れない。李王垣殿下がはたして山好きであられたのか、私には過ぎし日のことなど思いめぐらせる資料でもあるのだ。

書名……………『鳳凰山』

著者名……………加賀爪鳳南

発行所名……………ハイキング社

発行年度……………昭和八年

(田畑真一)

丸清板録書

東海道五十三次の解説

小島鳥水述

小島さんの著作については、「山岳」四十四年第一号の藤島敏男、田辺主計両氏による、「鳥水・小島久太著作目録並解題」や、遺著「山の風流使者」巻末の「著作目録」に詳しい。また

小林義正氏は「山と書物」の中で「著作目録に洩れた鳥水の著作」と題し、前記二つの目録に洩れたものを丹念に調査して書かれている。

ところがこの六月だったか、西武百貨店の古書展で何の気もなく偶然手に入れたのが標題の一冊。帰って調べたら小林さんの本にも記されていない。二十六ページの薄いものだが、はしがきによると大正八年末浮世絵研究会が頒布した一立寄重画「丸清板録書東海道」の画集に付したもので、小島さんが米国から一時帰国された際、よく脱稿したものである。はしがきには大正九年八月と記されているところから約八カ月遅れてこの解説書が予約者の手もとにとどけられたものと思われる。内容は「発行の年代」から始まる「類聚作品」との関係「富士山」第六章の「雲」など読みごたえがある。

本書は当然鳥水の著作目録に加えられなければならないものと思ひ持参した次第。(山崎安治)

志賀重昂の署名本

『世界山水図説』

著者(一八六三—一九二七)四十八歳の時の著書で、明治四十四年九月十五日に初版が出て以来、十日後には再版され、二カ月後には第六版が出る程よく売れたものらしい。私のこの本は明治四十五年三月二十八日発行の第十版である。発行部数は不明だが、有名な「日本風景論」が再版まで二カ月、十版へ五年近い歳月を要しているのに比較して、そのすさまじい倍の普及力には驚かされる。この本の主たる内容は、著者が明治四十三年三月、当時の軍艦「生駒」に乗ってシンガポールから南アフリカの喜望峯を廻って南米アルゼンチンに赴き、アルゼンチン

建国百年祭に参列後、ブラジルから西欧諸国を巡り帰国したときの旅行記である。

本書は、その巻頭にも記されている如く、その収益金をすべて地理調査のための経費に寄付するというもので、購求者が記念に著者の署名を求めたなら揮毫落款するところから、かなり署名本が出廻ったものと思われ、こんなにちわわわが接するゆえんとなったものであろう。

著者は漢詩をよくし、本書には「時平却要識世界」の七言を書し、署名は昂の一字を以てしている。印章は著者の号であるところの「矧川」である。この号については、岩波文庫版「日本風景論」の解説で小島鳥水さんが詳しく述べておられるように、出生地の岡崎市を流れる矢矧川(現在の矢作川。やはしがわと読む)からとったもので「しんせん」と読むのであろう。

書名は「世界山水図説」となっているが、山に関する記事は殆んどなく、僅かにスイスのヴェッナーホルンと、西アフリカ、テネリフエ山の写真が載っているぐらいで、山書としては寂しいが、旅行書としては面白く、資料としては貴重な一本である。(神原忠夫)

計報

田畑憲治氏(会員番号四四一七番、昭和三十一年七月入会。紹介者 初見一雄、金坂一郎)

日大山岳部の古い先輩で、昭和九年四月、馬場島より池ノ谷左俣を経て剣岳岳頂(池ノ谷左俣の積雪期初登)の記録をもつ田畑憲治氏は昭和四十五年七月十日、急逝されました。享年六〇本会は謹んで哀悼の意を表します。

図書紹介

小さな旅の記録

関田美智子編

ユニークなネパール・ヒマラヤ・トレンギングの報告書である。アンナプルナIII遠征隊からある事情のため、たもとを別かつた四人の女性たちは中央ネパールの踏査を目的に一九七〇年三月九日羽田を出発した。最初カトマンズからガンジエ・ラを越え、ランタン・コラに下り、シャルブル・ベンシに出で第二次マナスル隊が通ったガランIIテプレンIIカシガオンと西へ向かいブリガンダキからさらに西進、ナムン・ベンジャンを越えてボカラに出る予定であったが、雪のためガンジエ・ラ越えが出来ず、ゴザインクドからシャル・ベンシに出でブリガンダキに下り、シランダラからグルカに出で一カ月にわたるキャラバンを終えた。報告は日記体で隊員が分担執筆しており、男だけの隊には見られない面白い話が随所に出てくる。質の悪いビスケットを食べすぎた上に、チャンを飲んで、夜、テントの中に迷惑千万な匂いをまき散らす話。キャラバンの終点に近いチムルで若い男と間違えられ、夜の女にさそいをかけられた話。バナナの好きなメンサーブというシェルのジョークに、うけて立つのはたった一人の既婚者山田隊員の話、などいずれもケツ作である。

- 出国手続から、食糧、装備、医療などについても詳しく述べられており、これからは新しくネパール入りをする隊にはよい参考になるだろう。第四章のネパール探訪では「ネパールの民話」「シェルバポーターの体格及び体型」「ネパールの民衆」など、それぞれのテーマで、このトレッキングの収獲をしるしている。しかし一番の収獲は気の合った同志の楽しいキャラバンで友情を強めたことであろう。(山崎安治)
- 昭和四十五年十一月中央ネパール踏査隊発行。A5版二五ページ、写真一四枚、地図一枚、希望者は浦和市白幡五二八関田美智子あて申し込めばよい。頒価七百円
- ### 国書室便り
- 昭和45.1
定期刊行物受入報告
【部報・会報類】
(1)山村民俗の会『あしなが』No. 124 (45-12)
(2)小千谷山岳会『ハイザック』No. 29 (45-12)
(3)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 44 (45-1)
(4)国立公園協会『国立公園』No. 253 (45-12) (45-12) (45-12)
(5)京都山岳会『京都山岳』No. 549 (45-1)
(6)長野県山岳総合センター所報 No. 3 (45-1)
(7)名古屋山岳会月報 No. 23 (45-11)
(8)奥多摩山岳会『OMCレポート』No. 251~253 (45-10~12)
(9)東京野歩路会『山嶺』No. 489 (45-1)
(10)札幌山岳倶楽部部報 No. 84 (45-12)
(11)日本自然保護協会『自然保護』No. 102 (45-12)
(12)日本山岳協会『特別事業報告書』(海外登山技術研究会報告)昭和44年度(45-11)
(13)日本山岳協会『登山月報』No. 22 (45-1)
(14)日本登山協会『山と雪』No. 153 (45-1)

(46-1) 55 魚津岳友会『ZINNE』No. 13/14 (43/44) (雑誌) (1) 『人』 No. 248 (46-2) (2) 『HILKER』 No. 184 (46-2) (3) 『山』 No. 389 (46-2) (計画書 報告書 その他) (1) 日本長期信用銀行山岳部『はるかなる台湾の峰々——一九七〇年五月訪華親善登山登山記録——』 (2) 岩崎通信機K.K.友愛会山岳部雪山登山隊『雪山登山報告書 一九七〇』(細川善清氏寄贈) (3) 拓植大学山岳部友会『中部ヒンドウクシ登山計画書 一九七一年六月—八月』 (4) 日本ヒンズー・クシ会議事務局『第一回日本ヒンズー・クシ会議報告書 一九七〇年三月』(雁部貞夫氏寄贈) (5) 毎日グラフ『日本大学シタ・シタラ峰登頂』70, 1/31『グランドショアラ北壁』70, 2/7 (広羽清氏寄贈) 洋書受入報告 M. Georges Sonnier 寄贈 L. Georges Sonnier "La Montagne et l'Homme" Paris, Albin Michel, 1970. Journals Arrived in January 1971 1. "Akademischer Alpenclub Bern. 65. Jahresbericht." 1. Nov. 1969-31. Okt. 1970. 2. "Die Alpen" No. 11-12. November-Dezember 1970. 3. "Die Alpen" Jahrgang 46, Quartal 4. 4. "Alpinismus" 1970-12. 5. "Appalachian bulletin" Vol. 36, No. 11. November 1970. 6. "Der Bergsteiger" Jahrgang 97, Heft 12. Dezember 1970.	7. "The Geographical Journal" Vol. 136, Part. 3. September 1970. 8. "Österreichischer Alpenverein. Mitteilungen" Jahrgang 25, Heft 11/12. Nov./Dez. 1970. 9. "Österreichische Alpenzeitung" Jahrgang 88, Folge 1373. Sept./Okt. 1970. 10. "Panorama of Slovakia" 1970-8. 11. "Rivista mensile" Anno. 91, No. 10. October 1970. 12. "Till Falls" 1969-1970. 13. "U.I.A.A. Bulletin" No. 42. Décembre 1970. 14. "The Yorkshire Ramblers Club Journal" Vol. 10, No. 35. 1970. 15. "Switzerland" 1970-2. 16. "Rivista mensile", Vol. 65, No. 3/4. Vol. 68, No. 5/6. 7/8. 9/10 & 11/12. (from Club Alpino Italiano Sede Centrale) 図書委員会報告 一月二十日(水) 午後六時三十分 (図書室) 山崎 大橋、武田、荻野、松村、村石、伊藤、野上。 テーマ『富士山』 日時 三月二十三日(火) 午後六時より 場所 ルーム 二、榎亭の件 次回図書委員会に実物を持参してもらう検討する。	▲出席者 吉沢副会長、中屋、藤井丹野、山崎、野上、神原、松永、大森小倉、中島、川上、熊谷、宮下各理事 渡辺、今井監事 ▲議題 △エベレスト国際隊の件(藤井) 常務理事会としては①小西の代わり一名を推薦し、二名を派遣する②植村一名を派遣する③派遣を取り止めるの三つの案について考慮した結果、これまで通り①案を進めることにした。 小西の代りの人員の選考の基準として①出来るだけエベレスト南壁の経験者のうちから考える(エベレスト南壁の経験者、岩壁登攀の技術、八千m以上の高度順化の三点を前提として)②小西の意見を考慮する③同行者である植村の意向を尊重する。以上三点からエベレスト本隊に参加した伊藤礼造隊員を小西隊員の交替員として推すことにし、毎日側およびデイレインファース隊長と折衝している。 最終的にはデイレインファース隊長と打ち合わせて二月五日ごろ帰国する毎日北川事業部長と会い決定することになる。 △来年度役員の件 (藤井) 次回常務理事会で最終案をまとめた。 △本年度財務の件 (藤井) 二月四日の財務委員会の結果をまとめてあらためて検討する。 ▲報告 △ネパールポスターの件 (丹部) 万博ネパール館で使用したカラー大型ポスター二種が大量ネパール大使館にあり、これの処分を依頼された。希望者に二枚三百円くらいで頒布したい。 △山岳六十五年の件 (中島) 出版は原稿の関係で少し遅れる。 △小西隊員凍傷の件 (大森)	二月二日東横病院で手術した。約一カ月で退院の予定である。 △エベレスト・フィルム(宮下) 貸出し規定を作り、支部は無料、その他二千万の貸出し料にしたい。遠隔地への荷作り、送料は負担してもらおう。 △図書委員会の件 (野上) 三月二十三日山岳圖書を語る夕べを昨年度と同様に開くことにした。またコピー機の購入を考慮している。 駐新田大使館送迎会 初代駐ネパール大使として日本大使館の開館に御努力された吉良秀通大使は、昨年十二月二十七日、二十年十カ月の任期を終え帰国された。後任は根本博大使で、本年一月末にカトマンズに赴任される。吉良大使の在任中は本会派遣のエベレスト登山隊、マカールI登山隊などが日本大使館にて大変お世話になった。そこで本会では一月二十日夕、吉良、根本両大使を麻布、国際文化会館に招き、日本・ネパール文化協会との共催で歓送迎会を開催した。三田会長(本会)日高会長(日ネ協会)の挨拶につき、日本工営の久保田豊社長(日ネ協会評議員)の首頭で乾杯し、新旧両大使がそれぞれエモアあふれる挨拶をされた。吉良大使は辺境の地での新大使館開館の苦勞話を、大使公邸の庭園造りの件など、カトマンズで毎年開かれるガーデン・コンベンションで二位になったことと共に述べられた。また当日は、在ネパール日本大使館で三年間多くの登山隊の面倒を直接みてくれた本会々員、松沢憲夫君の歓迎も兼ねて行なった。 △出席者(招待客) 吉良秀通、根本博両大使、井口外務省南アジア課長菊池同課員、松沢憲夫元在ネパール日本大使館職員(現OTCA勤務)。(本会)三田会長、吉沢、深田両副会長、島田 異、松方三郎、小原勝郎、藤井連平、山崎安治、丹部節雄、宮下秀樹、中島寛、松田雄一、大森薫雄、神原達、田村宏明、三枝礼子、牧野文子、関口周也、(日ネ文化協会)日高会長、安芸、川喜田二郎、工業英司、高橋照新家義雄、石坂昭二、恵下浦、伊藤文三、神谷恭(北三、尾山登代理)橋本俊男、吉田一男、林勝三郎、小森鏡蔵、二宮隆夫(以上日本工営)、里見駿介(三菱商事)、田村真知子(日ネ協会事務局)
--	---	--	---

改姓

五〇六一 林 巳胤子 旧姓原
六六四五 熊本昭子 旧姓佐藤

ルム日誌(46年1月)

13日(水) 理事評議員会

20日(水) 図書委員会

婦人懇談会委員会

22日(金) 常務理事会

26日(火) 臨時常務理事会

一月中来室者 二四八名

二六六回小集会

第二六六回小集会 第二六六回小集会は十二月十六日午後六時半から本会ルームで京都山岳会佐々木徹氏の「北中南米十七カ国踏査とアンドン登山隊」の報告を行なった。ペルーでは大地震に見舞われ、九死に一生を得た話などスリリングなものであった。出席者二十七名。

第二六七回小集会

恒例のJAC忘年会が十二月二十三日、午後六時から本会ルームで開かれた。村井米子さんの挨拶で乾杯し、今年の話題に入る。須田紀子さん御手製のサンドウィッチも大好評で、忽ち売れつくしてしまった。韓国の尹さん、李さんも混じえて、なかなか雰囲気

ガストンの山岳書店

店主・L.C.ボーム(英国山岳会員)

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案内書、特殊地図、版画なども取扱っております。型録その他のご照会、お申込みをお待ちしております。

宛名

"GASTON'S ALPINE BOOKS"

134 Kenton Road, Harrow Middlesex, HA3. 8AL. England

(なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr. Ichiro Yoshizawa は、私の親しい友人です。)

の中でのプレゼント交換は、ヒラリー氏の写真、エベレストの石やスケッチも飛び出すなど、JACならではの豪華版。お馴染みの勝田房治さんの手品は、ザイル、カラビナなどの新しい使用法で、さすがの山のベテラン達も煙にまかれる有様であった。山口節子さんの「聖夜」独唱の後、皆で「蛍の光」を合唱して散会になった。出席者二十七名。(中垣淑子)

昭和四十六年三月十日発行

東京都千代田区神田錦町三十三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金 700 円也

送料 別受け 金 120 円也

ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2~15 電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7 電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15 電話(731) 7331 (代表)
工場: 大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は

日本団体生命

へ

角筈支部(専門取扱営業所)

東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内

電話(352) 1556・1557

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著

＜A 5判482頁＞定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

＜四六判400頁＞定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

＜B 6判334頁＞定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

＜四六判280頁＞定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

＜A 5変型判340頁＞定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

＜B 5判206頁＞定価2,800円

40年のキャリアをもつ編集と内容。

赤いカバーでおなじみの……

山日記 1971年版

日本山岳会編

＜A 6判400頁＞定価750円

山 岳

日本山岳会編

＜A 5判＞ 64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円
60年 1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

＜A 5判リング綴り＞定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

＜B 6判202頁＞定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

＜A 6判126頁＞1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

＜菊判584頁＞定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

＜A変型208頁＞定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

＜A 12取変型判170頁＞定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

＜A 5判350頁＞定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

＜B 5変型判220頁＞定価3,000円

南極新聞1956～7年

南極研究会編

＜B 5判横トジ＞定価600円

登山・スキー用具専門店

山の店

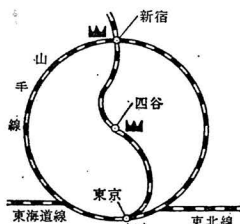
大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

T E L (352) 6 5 6 4

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なんでも、なんにもしない方がいいけれど、どうしても必要なものがある。なにしろ人間ですから、そして、山ですから。



おたるぐンテイ
でんや 281-8456

中央区八重洲4-1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区宮崎崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

